

イエスは彼らに言われた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が詩編の中で言っている。『主は、私の主に言われた。「私の右に座れ / 私があなたの敵を / あなたの足台とするときまで。』』このように、ダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアはダビデの子なのか。」（ルカ20：41～44）

ファリサイ派の人々とヘロデ党の人々は「皇帝への税金」について、そして、サドカイ派の人々は「復活」について、主イエスを陥れようと論争を仕掛けたが、見事に切り返されてしまった。そこで、主イエスはご自身の方から、彼らに語りかけられた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が詩編の中で言っている。

『主は、私の主に言われた。「私の右に座れ / 私があなたの敵を / あなたの足台とするときまで。』』このように、ダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアはダビデの子なのか。」

ダビデはイスラエル人にとって、神を畏れる真の信仰者、イスラエルを大国に導いた王として、誰もが憧れる理想の王であった。それゆえ、メシアはダビデの子孫から出ると信じられ、メシアは「ダビデの子」と言われた。エリコで、道端に座って物乞いしていた盲人は、主イエスが通りかかるのを知って、「ダビデの子よ、私を憐れんでください」と叫び続け、目を開けてもらえる奇跡に与っている。彼は主イエスを「ダビデの子」と呼び、「メシア」と信じていた。ところが、上記の記述においては、主イエスは、「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」と、メシアはダビデの子ではないと言っている。その証拠として、詩編110編1節の「主は、私の主に言われた。『私の右に座れ / 私があなたの敵をあなたの足台とするときまで』」を引用している。この詩編は、新しい王の即位の時、新王の力を誉め称えて歌った詩である。詩人は明らかにダビデではないが、「ダビデの詩」となっている。従って、「主（神）は、私（詩人・ダビデ）の主（即位した王）に言われた」ということになる。この詩から、主イエスは、「主（神）は、私（ダビデ）の主（メシア）に言われた」と解釈している。ここから、ダビデはメシアを「私の主」と呼んでいるのだから、メシアは、「ダビデの子」ではないと言っている。メシアはイスラエル人が信じていた「ダビデの子」ではないと力説している訳である。

これらの言葉は、主イエスご自身の言葉ではない。マルコ、マタイ福音書に平行記事がある。70年代に書かれた最も古いマルコ福音書を継承しているが、これは、明らかに初代教会の信仰告白である。イエスの時代では、メシアはダビデの子と信じられていた。しかし、福音書が書かれた教会の時代には、イエスは神の子メシア・キリストという信仰が確立していた。その時代に、福音書の記者たちは、イエスはダビデの子ではなく、メシア・キリストであるという信仰を明確にするために、主イエスの口を通して語らせたのである。

福音書は主イエスの生涯を描いているが、それは、歴史的事実に基づく史的イエスそのものを書いたものではない。イエスをキリストと信じる信仰に立って、キリスト告白として書かれている。もちろん、史的イエスの事実を基礎にしているが、上記の記述は教会が編集したものである。聖書を読むということは、歴史的出来事であった史的イエスを追いつながら、初代教会の信仰を受け止めることであり、神との結びつきを可能にする霊的理解を得て、キリスト信仰が深められていくのである。